スヌーズレンの実践の現状と今後の展望

企　画　者　柳本　雄次　（東京家政大学）
司　会　者　大崎　博史　（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）
話題提供者　奥山　敬　（東京都立光明学園）
　　逵　直美　（東京都立光明学園）
　　西塚　裕人　（埼玉県立越谷特別支援学校）
　　西木　貴美子（東大阪大学短期大学部）
　　西村　知哉　（聖マッテヤ心豊苑）
　　柳本　雄次　（東京家政大学）
指定討論者　大崎　博史　（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）
　　後上　鐵夫　（大阪体育大学）

KEY WORDS:スヌーズレン　特別支援学校　障害者支援施設

【企画趣旨】

障害のある人が、視覚、聴覚、触覚、嗅覚等の感覚を活用し、心地よい環境の中で自由に探索活動を行える環境づくりを進めることがスヌーズレンの基本的な理念であると考える。わが国においても、特別支援学校や障害者支援施設の中でスヌーズレンの実践がみられるが、どのように展開されているのか等の状況についてまだ不明確な部分も多い。

今回は、スヌーズレンの理念を生かして教育・福祉等の現場でどのような目的でどのような方法で取り組まれているのか、そしてどのような課題があるのかについて話題提供に基づき議論を深めることにより、今後のスヌーズレンの展望を検討したい。

【話題提供①】「スヌーズレンを活用した授業における子どもの捉えと目標の設定」（奥山 敬・逵 直美）

肢体不自由の特別支援学校において、年々重度重複化している子どもたちの発信をどのように受け止めていくのかは大きな課題である。「光遊び」では、音や光などの聴覚・視覚や嗅覚・触覚などの感覚刺激が得られる教材を工夫しながら、子どもたちの発信を受け止める授業をしている。

また、スヌーズレンの授業の様子を紹介し、子どもたちのどの部分に焦点をあて、目標を捉えていくのか現状と課題について考えたい。さらに、スヌーズレンを活用することで引き出される子どもたちの可能性について協議していきたい。

【話題提供②】[教育活動としてのスヌーズレンの活用」（西塚　裕人）

障害が重い子どもたちの学びの充実は特別支援教育の課題の一つである。スヌーズレンの活動はどのように有効か。また、特別支援学校の教育課程においてスヌーズレン活動をどのように位置づけていくか。また、その活動により、どのような教育的効果が期待されるのか。特に自立活動としての有効性に注目し、事例を通して協議し話題を深めていきたい。

【話題提供③】「上海の特別支援学校におけるスヌーズレン」（西木 貴美子）

日本の特別支援学校でのスヌーズレンの活動は，学校により異なり，内容・評価方法はまだ手探りの状態である。先進的にスヌーズレンを教育に取り入れている中国上海の特別支援学校での取り組み例を紹介し，今後の日本でのスヌーズレンの教育現場での活用を考えていきたい。

【話題提供④】「スヌーズレンの刺激の組み合わせと課題」（西村 知哉）

障害者支援施設にスヌーズレン・ルームを設置し、利用者を対象に、実態把握に基づき心身のリラクゼーションや運動機能の向上等その目的に応じて適切な多重感覚環境を設定し、静的及び動的なスヌーズレンの実践を行っているが、スヌーズレン・ルームをどのように活用していくかという課題がある。重度重複障害者に対して、光の選択を中心としたボールプールやバブルチューブの活用法を実施してみた。音に対しては、過緊張を誘発する原因になり音楽に変更した。刺激の組み合わせに対して、光に最も合う刺激があれば協議していきたい。

【話題提供⑤】「スヌーズレンとは何か―原点に帰って考える」（柳本 雄次）

スヌーズレン研究は、その実践の普及と集積に比して必ずしも十分とはいえない。また、スヌーズレン実践は経験知としてその有効性が言及されているが、厳密な研究はほとんど蓄積されていない。その原因の一つに、スヌーズレン研究が、対象、治療・教育等の活用目的及び方法に応じてきわめて多様化していることがある。

そこで、改めてスヌーズレンの原点に帰って、スヌーズレンとは何かを考えたい。それにはスヌーズレンの基本的な理念・コンセプトの独自性について、障害児者の感覚に関する従前の理論及び実践と対比させつつ把握した結果を報告し、議論に供したい。

【指定討論者の主旨】

「スヌーズレンの活用目的と実践上の課題」（大崎 博史）

教育や福祉の現場で、なぜスヌーズレンを活用するのか。目的のない活用はあり得るのか。日頃、疑問に思っているこれらの問いを中心に、スヌーズレンの活動がどのような目的のもとに実践されているのか、また実践上の課題について、各話題提供者に質問し考えを整理したい。

「スヌーズレンの活用効果と評価の実態と課題」（後上 鐵夫）

教育や福祉の現場で活用されているスヌーズレンの効果を担当者はどのように評価しているのか。その実情と課題を明らかにしていき、今後の指標となりえる情報等を整理していきたい。

(YANAGIMOTO Yuji, OSAKI Hirofumi, OKUYAMA Takashi, TSUJI Naomi, NISHIDSUKA Hiroto, NISHIKI Kimiko, NISHIMURA Tomoya, GOKAMI Tetsuo)